

第5章 横川ダム水源地域ビジョンとまちづくりで目指す方向性への提言

5-1 「湖畔の森ふれあいゾーン」の機能のレベルアップ

5-1-1 「湖畔の森ふれあいゾーン」の機能

まず、機能のレベルアップを図るためには、当該ゾーンの目指す方向と、その担うべき機能を明らかにしておかなければならない。

そこで、「湖畔の森ふれあいゾーン」の整備目標と、当該ゾーンに期待されている機能を、当ゾーンが新たに加わった過疎地域自立促進計画や、本報告書の第1章1-2-2で見直した「横川ダムに関連するこれまでのまちづくり構想」から要約し、さらに、本調査において必要と思われる機能を加えて以下のように整理を行った。

■ 「湖畔の森ふれあいゾーン」の整備方針

「地域資源を活用したコミュニティゾーンの形成」

■ 期待される機能

- ①まちづくりを軸にした地域内交流機能
- ②地域活性化に向けた地域間交流機能
- ③地域住民や観光客等来訪者のスポーツ・レクリエーション・地域文化ふれあい機能
- ④新たな産業や事業への取り組みによる地域活性化機能
- ⑤人口の流出防止と人材育成の機能
- ⑥防災機能強化による水土保全機能
- ⑦ダム湖周辺の新しい景観創造機能
- ⑧次世代への地域文化継承機能

この他集落機能の維持や保全に関する機能があるが、これについては別途 5-3で検討を行う。

5-1-2 レベルアップにつながる活動メニューの検討

これらの機能を水源地域ビジョンで取り組む活動によって、レベルアップしていくことが、本町全体のまちづくりにとって望ましいことであり、その結果として他のゾーン形成へも良い波及効果が期待できる。

以下にそれぞれの機能ごとに、まちづくりで目指す方向に連動し、そのレベルアップにつながるダム水源地ビジョンの活動メニューとその支援施策等を検討して取りまとめる。

表 5-1 「湖畔の森ふれあいゾーン」の機能のレベルアップにつながる、ダム水源地ビジョンの活動メニューと支援施策の検討一覧表

期待される機能	ダム水源地ビジョンの活動メニューとして考えられること	レベルアップのための施策あるいは支援等
① まちづくりを軸にした地域内交流機能	<ul style="list-style-type: none"> ・「東部地区ふるさとまつり」の復活(ダム水源地ビジョンの策定や試行的活動に参加している人たちを中心として、この期間中に準備会を立ち上げる。) ・特産品開発のための地域共同体の組織化 ・学習環境としての資源や人材の掘り起こしを、まちづくりの一環として、地域住民が協働で取り組んでいく。 ・基督教独立学園創立の教育理念を地域内の交流や学習環境づくりに積極的に活かしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・東部地区で研究集会や講演会を繰り返し開催して地域づくりを学び、「東部地区ふるさとまつり」を成功させてきた経験を活かして新たな再出発ができるよう、町も講演会やイベント企画に対して多様な支援を行う。 ・この活動にはリーダー的人物の存在が欠かせないが、スタート時点は行政のしかけも重要である。
② 地域活性化に向けた地域間交流機能	<ul style="list-style-type: none"> ・白川ダムとのスポーツ関連イベントの共同開催(湖畔マラソン、カヌー大会、パークゴルフ大会など) ・歴史街道を生かした越後から米沢までの街道歩きなどの共同開催 ・九才峠を通して近接する白川ダム上流地域の中津川集落と連携して、グリーンツーリズムや子どもたちの農山漁村体験を受け入れる活動を共同展開 ・置賜地域全体に広がる桜回廊の推進 ・横川ダムの下流流域の住民との防災やダム湖の環境保全などをテーマとしたイベントによる継続的交流活動 ・都市域の住民や子供たちとの自然体験や食農体験交流、スポーツ交流などの推進 ・水源の郷交流館が来訪者との地域間交流の拠点となるような活動や、特徴ある郷土食の提供など、質的な向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行政が前面にでるのではなく、あくまでも地域の住民が主体となって交流活動を行うことができるよう、町は情報の提供やきっかけづくりの支援を行う。 ・ダム管理事務所は、活動の場の提供や、広報交流館での情報発信などの面で支援を行う。 ・特に白川ダムとの連携・交流は今後の可能性や相乗効果も大きいと考えられるため、管轄整備局は異なるが、国交省の積極的支援が求められる。 ・各省庁で実施されている地域活性化に向けた多様な施策に関する情報の収集と、有効活用への手法検討を行う。
③ 地域住民や観光客等来訪者のスポーツ・レクリエーション・地域文化ふれあい機能	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム湖を利用したカヌーやボート、ヨットなどの水上スポーツ基地 ・パークゴルフでの世代間、地域間交流の活発化 ・水辺や歴史街道を森林セラピー基地と連携したメニュー開発 ・これらの機能を充足させるための指導者、インストラクターの養成 ・縄文時代の遺跡に始まる地域の歴史や自然と共生してきた知恵などの地域文化に触れる体験の場をつくる。 ・民話をテーマとした交流活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民・町・県・国(ダム管理事務所)が連携して継続可能なスポーツイベントを育てていく協力体制を町が中心となって構築していく。 ・白い森の案内人や、NPO おぐに森と水辺の会、森林インストラクター会など、関連する団体やグループの協力体制づくりに対する支援を行う。
④ 新たな産業や事業への取り組みによる地域活性化機能	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の資源を活かした新たな産業や事業の起業化 ・地域の就業機会の拡大や経済的波及効果を高めていく商品開発 ・水源地域の森林の管理と木質バイオマスの有効利用 	<ul style="list-style-type: none"> ・町は地域の事業者、団体、NPO等に対して、起業化支援などの施策を推進する支援事業を積極的に紹介し、申請手続き等の支援を行う。 ・伝統的な技や知恵を有する人材

	<ul style="list-style-type: none"> ・観光レクリエーションの新しい動向に対応した受け入れや、森林セラピー基地との連携による交流人口の拡大 ・水の郷交流館や、地元で頑張っている商店などを新たな核として育て、その場所を仕事興しの機能に発展させていく。 ・グリーンツーリズムや子供たちの農山漁村交流に対応した農家民宿等の展開 	<ul style="list-style-type: none"> （高齢者）に生きがいを持ってもらう場を積極的に支援して増やしていく。 ・新たな核となる施設やそこで行われる活動に対して、効果的な波及効果を誘導する支援を行う。 ・国が推進する、長期宿泊体験を伴う自然の中での体験活動プロジェクトへの積極参加を、官民連携で取り組んでいく。
⑤ 人口の流出防止と人材育成の機能	<ul style="list-style-type: none"> ・①から④の展開によって、人口の流出を防ぐとともに、新しいUIJ Turner者や交流居住者を増やす。 ・新しい地域ぐるみの取り組みの推進が、地域の人材を育てていく相乗効果のしくみを構築する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町はUIJ Turner希望者や交流居住希望者の情報の窓口として、田舎暮らし体験ツアーなどの企画の更なる魅力向上を図る。 ・若い転入者の増加が地域に刺激を与え、活性化につながりつつあることから、彼らが将来に夢が持てるような具体的支援策を講じる。（例えば、地域の活性化につながる活動助成や、町の施策研究等への参加機会をつくるなど）
⑥ 防災機能強化による水土保全機能	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム湖上流に位置する森林や農地の保全等により、ダムの機能や安全性を高める取り組みの推進 ・下流住民が楽しみながら取り組める源流部の体験観光企画や交流会の開催 ・企業と連携した森づくりの推進 	<ul style="list-style-type: none"> ・町有林や管理放棄の民有林の維持や保全等に対し、住民やNPO等がかかわれるしくみづくりを行う。（P82※1 活動支援システムの例参照） ・水源環境税などを活用した、水源地域の森林造成や、維持管理に関する活動支援を積極的に行う。 ・森づくり参加希望企業の募集や情報提供を行う。
⑦ ダム湖周辺の新しい景観創造機能	<ul style="list-style-type: none"> ・周辺の自然と調和するダム湖及び周辺地域の景観の保全と創造に関する取り組みとして、絵画・写真コンテスト、俳句・川柳大会などの企画開催 ・春のオオヤマザクラ、初夏のヤマボウシ回廊、夏の溪流や湖水と緑あふれる自然景観、秋の紅葉の絶景、冬の純白の別世界など、それぞれの季節の景観を際立たせる演出や視点場の整備 ・地域の景観保全活動を行うNPO等を組織し、ダム湖畔を含めた上流集落の景観保全に関して地域の合意形成を図りながら保全活動を行っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな自然や美しい農村景観が損なわれないよう、町全体の景観計画とダム湖周辺の景観指針の策定を支援する。 ・地域住民が行う景観保全活動に対して、情報提供や人材派遣などの支援を行う。
⑧ 次世代への地域文化継承機能	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム水源地域ビジョンに盛り込まれた事業を展開していくことによって、地域素材を活かした食文化など、地域固有の文化の継承が期待できる。 ・上大石沢にかつてあった木地師の文化の伝承など。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ダム水源地域ビジョンの事業がまちづくりへの波及効果を発揮できるよう町として支援・誘導を行う。 ・地域の食文化を学校給食で子供たちが味わったり、郷土料理の実習プログラムを授業に加える。

5-2 東部地区の集落機能の維持・保全につながる活動メニューの展開

3-2において東部地区の集落機能の維持に関する現状と課題を整理したが、この結果から改めて、人口減少と高齢化、産業や就業構造の変化が、農山村の集落機能の立ち枯れ状況を加速していることが明らかとなった。

このような状況の中で、多くの課題を伴いながらも、全く新たな環境を創り出したダムという資源を、ダム上流地域がうまく活用して今後どのような地域づくりと集落機能の維持・保全を図っていくかが大きな課題となってくる。

5-2-1 集落機能の維持・保全につながる活動メニューの検討

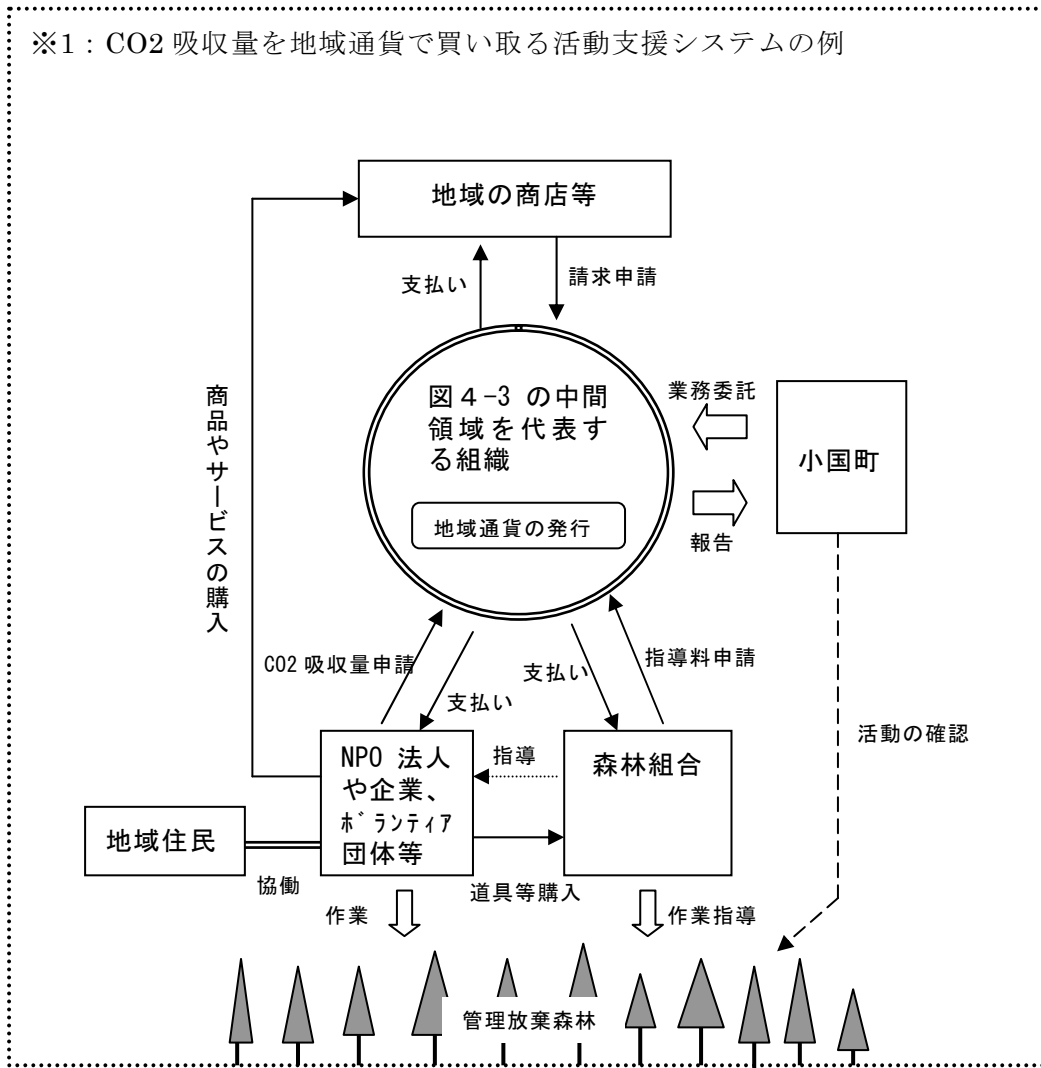
ダム水源地域ビジョンが、当該ゾーンのまちづくりで期待される機能のレベルアップに結びつくためのメニュー検討は5-1で行った。ここでは、ダム上流地域の集落機能の維持・保全について、ダム水源地域ビジョンによる活動が、それらの機能の改善につながるような展開メニューの検討を行う。

表 5-2 集落機能の維持・保全につながる活動メニューの検討

対象となる 集落機能	活動メニューの展開方向		関連する今後の行政 支援のあり方
	活動メニュー	展開方向	
国土管理機能	・耕作放棄地の活用	・新しい特産品づくりとして、耕作放棄地にヤマブドウやマタタビ、カシスの栽培を行うことによって、農山村景観の保全にも寄与する。	・転作奨励の有効活用その他、支援策を検討
	・里山の適正な管理	・管理が放棄された落葉広葉樹林を、NPOや企業等の活動フィールドとして活用できるシステムを構築していく。 ・発生する木質バイオマスは、きのこ栽培やエネルギー資源などとして利用し、資源の有効活用を図っていく。	・落葉広葉樹施業の支援策に関する情報の提供 ・森林施業計画の策定支援を行う。
	・管理放棄森林の手入れ	・管理放棄のスギ林の枝下ろしや除間伐、針広混交林への誘導などを、森の学校などの体験学習や、NPOや企業等の活動フィールドとして活用していく。 ・間伐材等の発生材は、できる限り収集して木工芸の体験学習や雪囲い、園路の補修、バイオマスエネルギーなどに活用していく。 ・企業と森林所有者が協定を結ぶことにより、企業は人工林の管理や植林作業（森林組合員などが指導）を支援する。 さらにエコツーリズムや森林セラピー的プログラムとの併用によって、社会貢献だけでなく福利厚生、社員研修、体験交流など多様な展開が可能である。	・NPO等のボランティア活動に対しては、その活動内容に応じたCO2吸収量を算定して、その評価額を地域通過として支払うような制度の創設を検討（※1） ・ダム湖周辺森林の将来ビジョンの策定や、森林整備計画の見直し

住環境保全機能	<ul style="list-style-type: none"> ・美しいの農山村風景や集落景観の保全 	<ul style="list-style-type: none"> ・周辺の自然景観と調和した田園景観や集落景観を保全・創造していくための具体的な活動として、桜回廊の取り組みや、景観保全に関する学習を「白い森の大学」などで取り組む。 ・ダム上流地域集落の景観保全活動を住民が全員参加で取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・景観計画や景観農業振興整備計画の策定、町森林整備計画との整合などによって、体系的に景観の保全を行っていく。
地域文化継承機能	<ul style="list-style-type: none"> ・地域固有の誇れる伝統文化の保全 	<ul style="list-style-type: none"> ・集落間や他地域と協力関係が構築できるテーマごとの連携を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報の提供や仲介で支援
	<ul style="list-style-type: none"> ・自然との共生の知恵を学び、自然に対する作法を身につける 	<ul style="list-style-type: none"> ・絶好の学習空間として資源や人材を活かしたプログラムの展開を図っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人材育成のための研修会等を実施
教育・文化創造的機能	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な自然と地域の文化資源を活用した学習環境の創造 	<ul style="list-style-type: none"> ・「森の学校」や「白い森の大学」などを継続的に開催していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町の事業としての委託や、人材の活用を支援する
	<ul style="list-style-type: none"> ・その学習環境を活用して、多様な文化、多様な人々との交流を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内、地域間、都市と農村などの交流を通じて、その中から新たな白い森の国の文化を創造していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・町の企画と連動しながら実績を積み上げる
地域産業創出機能	<ul style="list-style-type: none"> ・広域的な交流の進展に伴う、新たな地域産業の創出 	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な取り組みを通して、広域的な交流人口が増加することにより、多様なニーズが発生してくる。その一つとして地域固有の特産品の開発がある。これらを将来的に新しい地域産業に育てていく取り組みを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新規起業化への支援措置
地域自治的機能	<ul style="list-style-type: none"> ・個と公の間領域の見直し 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人が担うべき責任と、公共が行うべきサービスの間にある、集落協働作業が衰退してきている。今後の取り組みの中で、この機能を見直して新しい集落機能の活性化につながる体制を再構築していく視点を重視する。 ・集落の住民一人ひとりが、地域が自律していくための公益活動に参加する新しいしくみをつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・公共が行ってきた維持管理等の作業や集落で行ってきた作業を見直し、可能なものは地域に委託する
	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい合意形成と協働のしくみづくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい活動への取り組みには、地域住民の合意形成が不可欠である。ビジョンへの取り組みを契機に、住民ワークショップや、枠を広げた目的ごとの集会の開催など、新しい手法を試みる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現在実施されており、経過を見て手法の改善などを検討

※1：CO2 吸収量を地域通貨で買い取る活動支援システムの例



5-3 他の拠点エリアとの連携

全ての活動が、当該地域のみで対応できるものではなく、当然他の拠点エリアとの連携や協働が必要となる。特に、ダム水源地ビジョンへの取り組みは、まちづくり全体から見て、相乗効果が期待されるため、ここでは他の拠点エリアとの連携の可能性についてまちづくりの視点から、主な項目を選んで検討する。

5-3-1 ぶな文化の継承

ぶな文化の継承と創造的発展は、小国町が掲げるまちづくりの理念であり、その中心をなす「共生と循環の思想」は、これからの人類が生き続けるための重要なキーワードとなっている。したがって、本町の五つの拠点の一つである横川ダムを中心とする「湖畔の森ふれあいゾーン」の形成においても「ぶな文化の継承」は、町全体に共通するテーマとして、他の拠点エリアとの連携が不可欠となる。

そのテーマが目指すものは、ぶな文化の有する自然観・世界観を未来文明の基礎として、生き生きと学ぶことができる環境を創造することであり、その結果として本町で暮らしたいと思う多様な人々も快く受け入れながら活力ある森林理想郷を構築していくことである。したがって本町のまちづくりは、五つのゾーン全てに、この基本的な方針が貫かれている。

具体的な連携としては、ぶな文化の中でも、各ゾーンに共通するものと、それぞれのゾーンによって異なるものがあり、例えばマタギによる狩猟が特徴だった地域、魚を中心に捕っていた地域、木地師が多かった地域、炭焼きが盛んだった地域など、それぞれ異なる特徴を活かしながら、全体として連携していくことが必要となる。

また、現在残るブナ林の特徴も規模も均一ではなく、各ゾーンに分布するブナ林の特徴を活かしながら他のゾーンと連携することで、多様なブナ林の体験が可能となる。

5-3-2 森林セラピー基地の機能補填

森林セラピー基地は、飯豊山麓交流ゾーンにある温身平が登録地である。温身平は原生のブナ林があり、平坦地が多く、山歩きというより散歩気分でゆったり歩くことができる。

しかし、もしここに、森林セラピーを期待して多くの人を訪れた場合、せっかく自然の中にどっぷり浸れることを期待してきた人をがっかりさせることになる。当然、適正な入山者数をコントロールすることが必要であるが、温身平は飯豊山への登山基地の一つでもあり、設定されたルートだけでは容量的に十分な受け入れは難しい。

幸い本町には、他にもセラピーに相応しい自然は豊富にあり、その中から、補助的地域を定めて、全体のネットワークの中で対応することが可能である。

特に、ダム湖周辺のエリアでは、温身平にはない広々とした水辺空間と身近な里山、美しい農村風景などがある。一方、朝日山麓には傾斜はかなりきつい、広大なブナの原生林が味わえる。健康の森横根では、手入れされた美しいブナの二次林

を散策できる。これら環境の異なる地域が連携して森林セラピー基地機能を補填し合えば、参加希望者が増加した場合の受け入れ容量が増えるだけでなく、多様な森林環境を体験することも可能になり、町全体の地域活性化への影響も大きいと考えられる。

5-3-3 食文化の継承と商品化

ぶな文化の中に含まれる本町の食文化も地域によって異なる場合が多く、それぞれの地域で特徴的なものを商品化したい。これはまさに上杉鷹山がこの地域に奨励した地域活性化のための一村一品運動である。そのときの奨励品や現在既に販売されているものも含めて、各地域で昔からの食の特徴を研究し、その素材をベースに現代に合う商品開発を行うことである。

この地域の食材は、山野の自然の恵みや雑穀を素材としたものが多く、現代人が好む健康食そのものである。

したがって、各ゾーンが一つの名物をつくり、五つのゾーンの商品を5種類集めると一つのパッケージになるような工夫を行うなど、各地区が協力・連携して「白い森おぐにブランド」を商品化する。

具体的には、ゼンマイ、ワラビ、コゴミなどの山菜やきのこと類、クルミ、クリ、トチノ実など縄文時代から食されていた木の実、イワナやカジカなどの溪流魚などを材料とした食品、五穀や山菜を活かした薬膳料理、マタタビの薬用酒など、小国らしい食材を健康志向に対応した商品として開発していく。

5-3-4 人材の連携

各ゾーンで中心的に活動するのは当然その地域住民であるが、多様な活動を全て住民の力だけで実行することは不可能である。本町には、多様な自然資源に負けない多様な人材が存在し、自然との共生の技や知恵を継承してきている。しかし、この中の多くの人たちは高齢化し、次代への技や知恵の継承を図らなければ途絶えてしまいかねない状況にある。これは地域の問題だけでなく、ぶな文化の継承を標榜する町としては重要な課題である。したがってまず各地域における人材の洗い出しを、それぞれの地域で行い、継承のために必要な地域間の連携や協力体制を構築していくことが必要となる。

横川ダム水源地ビジョンの中で開始された「白い森の大学」などでも同様な活動が試行的に行われているため、一つはこの活動を通じて継承を図っていくことが考えられる。

本町の人材は、ぶな文化の継承という部分だけでなく、観光案内やネイチャーガイド、歴史・民俗研究家、有機農業家、登山家など多様であり、これらの人たちの活動情報をネットワークすることがまず必要である。

5-4 まちづくりを横軸で支えていく活動メニューの構築

本町のまちづくり戦略として推進している「白い森構想」の概念を、図 4-1 に示した。この戦略の柱である「白い森の国ふるさと文化村づくり」には縦軸となる 5 本の柱と、それらを横軸でつなぐ 3 つの主要な施策（「森の学校」の機能づくり、「森の仕事場」の創出と活性化機能づくり、「森の住宅」環境づくり）があり、縦軸の一つが当地区「湖畔の森ふれあいゾーン」である。

本町のまちづくりの考え方は、この柱を築き上げる作業とともに、この柱を横に紡いで補強していく 3 つの施策展開を図っていくことである。

したがって、ダム水源地域ビジョンで取り組む活動は、全て上記のまちづくり戦略に結びつくような展開が期待される。

そこで、以下にこの 3 つの主要な施策に収斂していく活動メニューの構築について提案を行う。

5-4-1 「森の学校」の機能づくり

本町では、まちづくりを推進する 3 つの主要施策の一つとして、活力ある人生を構築していくための戦略として「森の学校」の機能づくりを挙げている。

これまでも具体的に、「雪の学校」や「山菜の学校」などの体験交流が実施されてきた実績がある。本水源地域ビジョンでは「白い森の大学」として、それらを受け継ぎながら、ダム及びダム湖周辺の自然や歴史等を学ぶことを支援する活動が試行されている。

本町が目指す「森の学校」の機能の一つは、豊かな森や美しい農村風景を背景に、そこに住む住民（特に経験豊かな高齢者）が、個々人の巧みな力と技と知恵が詰まった場所をつくっていくことである。そしてその場所をつくっていく過程で住民自体が学ぶことによって生きがいをもち、その場所に来た来訪者がそれを学び、住民と交流が生れ、それによって住民が地域に誇りを持ち、しかも多少の経済効果につながり、お互いが助け合って生きていくことができる地域に育っていくことである。

つまり、ダム湖周辺地域が「森の学校」の場を提供するだけでなく、地域住民が「森の学校」にふさわしい場を創り上げ、その学校の指導者として活動していくことを前提としている。この活動が「森の仕事場」の創出と活性化機能へとつながっていく。

二つ目は、「ぶな文化」の継承拠点としての役割である。これは町内 5 つのゾーンに共通な役割と言えるが、特に交流機能が大きく情報発信機能の高い当地区において、小国町の存在証明ともいえる「ぶな文化」を継承するための学習機能を充実させることである。

三つ目は、森の恵みを最大限に活かす戦略として「森の学校」を活用することである。それは、林産物の生産加工であったり、木工製品であったり、うまい米や水であったり、エネルギー生産であったり、農山村での癒し体験を提供する農家民宿であったり様々な森の効用をメニュー化して提供することである。

5-4-2 「森の仕事場」の創出と活性化機能づくり

「森の仕事場」の創出は 5-2-1 の「森の学校」の機能づくりと連動するもので、「森の仕事場」づくりの側から言えば、「森の学校」を戦略的に利用して仕事場の創造を行っていくということになる。

現状における具体的な「森の仕事場」は、林業がそれほど盛んでない当地域では、観光わらび園やゼンマイ採りなどが主であるが、かつては山を仕事場とする木地師やマタギがいたし、織物用のアオソの採取や薪や柴の切り出しも行っていた。

これからの「森の仕事場」の創出は、昔の森と共生していた生活で培われた知恵を、将来の持続的社会的構築のために学び直すという意味も含め、一方で、森林セラピーやフォレストツーリズム・グリーンツーリズムといった新しい里山の活用や、雪の森を産業化に活かす雪室の活用など、この地域に相応しい「森の仕事場」の創出を図っていくことである。

その結果、森林が人を癒すだけの森林セラピーではなく、その地域の人の暮らしを含めた風土全体が、来訪者を暖かく包み込むことによって癒されるという世界を創造することができる。これが、まさに当地域の人々の親切さに心を打たれ、その行く先で見た米沢平野をアジアのアルカディアと言ったイザベラバードの心情であり、この地を訪れる来訪者に実感してもらうことができる大きな財産となる。

5-4-3 「森の住宅」環境づくり

横川ダムの建設によって、自然災害から地域を守る安心・安全な住宅環境が生まれたことを受けて、次は美しく快適な住環境の整備を目指す。

上流地域では特に水源地域ということで、生活排水の浄化等、ダムの水質保全への配慮や、ダム湖周辺に多くの人々がきてくれるようになった場合に、訪れる人々に良い環境と感じてもらうことが大切となる。

美しい街路や花壇、農村風景に似合った農家民宿のたたずまい、そしてそこに住む人々の思いが伝わる町並の美化などによって、背景の山並みや美しい里山、新しいダム湖を一層引き立てる風景を創造していくことを目指したい。

それによって、来訪者のあこがれの地となり、交流居住者や転入者の増加にもつながる桃源郷となる。